

新任教師に対する学校長の意見から見た教員養成上の課題

石 原 正 也*

教員養成を目的とする大学における教師教育の内容と方法の改善を図るための基礎資料として、最近の新任教師の生徒指導、学級指導、学習指導などの力量や、教師としての自覚、その教職教養などについて、教育実践の指導者、教育行政の管理者としての学校長がどのように受けとめているか、どこに問題点を感じているかなどの意見を自由記述方式で、県下の全小学校、中学校の校長に聞いた。その結果、“教科外指導の実践的能力”、“教科教育の実践的能力”、“学校教育に対する理解”、“教師の社会人としての基本的行動様式”、“教員社会への適応行動”、“教師としての人間性”についての問題点の指摘があった。

〈キーワード〉教師教育、学校長、意識調査、大学、教員養成、新任教師

はじめに

教師教育の改善を目的とし、昭和54年から始めた教員養成に関する意識調査は、教育実習生、新採用者（教師経験1年目）、教師経験5年目、10年目、教育実習生指導教官に実施してきたが、今回、教育実践の指導者、学校運営の管理者としての学校長に、新任教師を通して見た大学の教員養成の問題点の意識調査を依頼した。調査は、教師経験5年目、10年目の調査で新任教師の学習、力量が不足していると指摘された資料提示、および大学の教員養成の在り方について、学校長としての意見を自由記述方式で記入依頼した。

新任教師の不足項目

（在職5、10年目の意識調査）

	小学校	中学校	高校
(1) 教職専門	17	8	10 ^(%)
(2) 教科教育	14	11	16
(3) 生活指導	52	66	63
(4) 学習指導法	26	24	22
(5) 授業設計（計画）	15	8	11
(6) 学習評価	11	13	10
(7) 問題児童・生徒の指導	48	47	54
(8) 学級指導	29	48	35
(9) クラブ活動	1	6	23

調査の結果は自由記述方式のため、計量的処理は困難なので、内容をいくつかの観点別で整理し、資料集を作成した。この報告ではその資料集をもとにして、大学の教師教育改善の視点からみて各調査項目の代表的な意見と思われるものを次に例示する。

1. 調 査

調査対象

岐阜県小学校・中学校の全学校長

調査方法

郵送・無記名・自由記述方式によるアンケート調査

回答者数

307名（回答率 約60%）

調査内容

- (A) 生徒指導
- (B) 問題児童・生徒の指導
- (C) 学級指導
- (D) 学習指導
- (E) 教職専門
- (F) 教科教育
- (G) 新採用者の教師としての自覚、その他

* 岐阜大学教育学部数学科

- (H) 最近の新採用者についての御意見
 (I) 岐阜大学の教員養成に関する御意見

2. 調査結果

調査の結果を、生徒指導、問題児童・生徒の指導、学級指導、学習指導、教職専門、教科教育、新採用者の教師としての自覚、最近の新採用者、岐阜大学への要望の8項目について、全ての意見を列記しても処理が困難なので、それぞれの意見に共通化していると思われる意見の代表例、または重要な指摘と思われるものを抽出例示した。これらの各項目で主だった意見（各項目約50件）は、教師教育立案のための基礎調査資料～学校長の新採用者・教員養成に対する意見について～（1982. 1 石原正也）で報告した。ここではその資料の意見を検討し、さらに要約したものを報告する。

(1) 新任教師に対する全体的な意見

調査全体を通して学校長が指摘した新任教師の問題点としたものには、次のような事項があった。（この集計は、質問項目に無関係に記述されている内容を分析し、該当内容について記述した人数と全体の人数の比を求めたものである。）

(a) 学校教育活動に関する事項

学校教育に対する理解	21 %
教科の実践的能力	60 %
教科外指導の実践的能力	76 %

(b) 新任教師個人に関する事項

社会人としての基本的行動様式	43 %
教師としての人間性	41 %
教員社会への参加	48 %
研究心	27 %
自己中心（身勝手）	24 %

全体を通して学校教育活動の面で最も多い指摘事項は、「教科外指導の実践的能力」と「教科の実践的能力」で、大学教育が狭い領域の学

問研究に閉じこもっており、人間教育としての視点に欠け、教育活動のための基盤づくりや、児童生徒の実態と結びついた教材化の能力などに対する教育の不足を強く訴えている。

また、新任教師の人間性に関しては、教員社会への参加（教師としての集団活動からの逸脱、教員社会に適応できない教師など）、社会人としての基本的な行動様式の欠如（一般人としての社会生活上での問題点、躰、言葉使い、礼儀作法等の日常生活面での欠如）を指摘している。これらの具体的内容、問題点、教師教育での課題については次の各項目に分けて具体的事例で示す。（回答された内容をそのまま記載したため、一部で同じ意見が重なることもある。）

(2) 質問項目別意見

(A) 生徒指導

全員（307名）が回答した項目であり、現在の大学教育での中心的課題であること、その切実性がよく示されている。なかでも、次のようにその問題点を指摘している回答が多かった。

「生徒指導の目的や意義等基本的な理解が不足している。したがって各教科、道徳、特別活動の授業場面でどうすることが生徒指導なのかわからないため、実践に不備な点が見受けられる。また、生徒指導の基盤となる児童理解の内容と方法が不明確なため、観念的抽象的な授業展開が見られたり、ひとりひとりを見落としがちである。」

このように、生徒指導の目的や意義等の基本的事項の理解不足という、原理面での弱さの指摘が多いことは、われわれにとって重要な課題である。

具体的な生徒指導の姿勢については、次のような指摘が多かった。

「やさしさときびしさの使いわけができない。やさし過ぎると子供になめられて、指導ができない先生になってしまう。もう少し、やさしさときびしさを使いわけれる先生にしてほしい。」

「弱い子ども、下積みになっている子どもに目を配るあたたかさの乏しい人がいる。そのことが原因であらうか、一般に子どもとともに生きる、常に子ど

ものの中にいるという気構えが弱い。」

また、生徒指導以前の問題として、教師自身に問題があるという指摘も多く、これらに教師教育ということで、大学としてどのように関わればよいのか考えさせられるものがある。

「児童ひとりひとりととらえた指導が本来の姿であるが、基本的な生活指導について現在問題をかかえている。当然行なわなければならない躰や作法等、まず教師自身が身につける必要がある。」

「若い先生の生育の過程の中に躰、規律といったものが主体化、内面化されないまま現在に至っているようである。したがって生徒指導の立場で自己規制ができず、あいまいな指導をすることがある。」

「生徒指導は現場に入っているいろいろ勉強しながら力をつけていくことが多いので、最初から多くを期待することは無理であると思います。特に教師は最初に赴任した学校によって決まるとさえいわれます。受け入れた先生を一人前に育てるよう一生懸命指導しますが、その時指導しても効果の表れないのが自分自身の生活態度が出来ていない人間です。教師である前に一人前の社会人であることが必要であります。社会人として通用する人間性を大学時代に教育していただく必要を痛感します。」

具体的に生徒指導力の向上のためには、第一には大学教育で生徒指導の講座、事例研究演習と、現場の初任者教育での事例による教育を強化し、さらに新任者には先輩に学ぶ積極的な姿勢を持つように望むことにつきるのはなかろうか。

「最近とみに叫ばれるようになった中学生の生活上の問題は深刻で、ベテラン教師をも出勤したくない気持ちまで抱かせるようになってきている。こうしたことは、余程「生徒理解」ができると思われる教師群をも自信を無くさせてしまっている。したがって現状では、新採用者にはその任が責任もってはたせないだろうが、大学にあっては、生徒指導の根幹である「生徒理解」について講座を持つことや、生々しい事例研究等の演習も必要ではないだろうか。」

「教職課程の中に、生徒指導関係の課程を位置づけ、その充実を図ることが必要である。」

「大学に於て生徒指導を教育課程の一部として、必須のものにすることを望む。」

「個々の子どもの持つ不平、不満、不安を子どもの立場に立って聞き出すためには、子どもに教師の信頼感が前提となりますが、原因が明白につかめれば治療は容易だといえます。この意味でカウンセラーとしての技術を身につけさせてほしいと考えます。」

「生徒指導の重要性は今日的な課題である。日々の児童生徒の正常な学習指導を支えるためには生活指導と生活指導の実践上の差異とその役割について正しい理解と認識を得ていることが大切である。このために児童生徒の指導にあたって、手慣れた方法と考え方を先輩や、指導者から進んで学ぶ意欲の強い教師でなくてはならない。」

「特に小学校では、問題行動がおきないために、認識がやすい。小学校時代に生徒指導をしっかりやっておかないと、中学生になってから問題行動が発生しやすいことを事例や調査結果などを通して具体的に理解させたい。」

(B) 問題児童・生徒の指導

問題児に対する新任教師の現状、また姿勢について次のような回答が多い。

「問題児が出来たのは、教師としての自分の責任だとしめない。親が悪いのだとする。」

「問題児にふりまわされて、学級経営全体が宙に浮いてしまう例（そこで教師自体がつぶれてしまう。）を多く見聞する様になった。」

「現場の責任だろうが同時に、非常にろい精神状態の教師が多くなったことも事実である。」

「全般に“甘い”といえる。それは、新任者の生きて来た生活そのままだが、教育への認識となっており、現実の混濁した事実の中では、“アスファルトの上を、皮靴で歩いている”ような感じさえ受ける。これは致し方ないであろう。」

この解決のためにはまず、新任教師自身の意識の改造についての要望が多かった。

「生徒指導主事・先輩教師に委任するのではなく、自らが助言を受け積極的に立ち向かうという意識の指導。」

「問題生徒の指導・助言、あるいは叱り方が、大変未熟であるようです。特に気になるのは、叱り方に迫力がないことです。問題生徒に対して、何のために・いつ・どのように叱るかという基本的な指導理念など、勉強不足だと思います。また、叱り方の技術なども未熟だと思います。」

「教育的に体当たりしていく力がほしい。」

自分だけ悩んでいるだけではいけない。もっと同僚・上司に早目に相談する姿勢が大切。

めんどろをさける意識がつよい。」

「事実だけを表面的にとらえ、家族・父兄はもとより、学級・学年間でのその子の「場の論理」、人間的な感性をふまえた指導ができない。教師自身の人間的な幅の広さ・視野など、人間理解が不足している。このため、感動を与え、真の魂の覚醒に至らしめる接し方ができない。」

「人間的に冷たい教師に何ができよう。一見学者の如き問題教師を抱え、管理職が苦しんでいるのが現状。妙なエリート意識だけしか持ち合わせない教師にはできない相談。ヒューマンイズムの溢れた教師でなければ、ここまできた問題児・生徒の指導は、できない。」

さらに教育現場の課題として、次のような指摘もあった。

「力量が不足していても当然であり、それを指導していくのが先輩教師の役目である。」

「障害児について特別な意識でみたり、できればきたい気持ちが強い。従って、特殊学級担任希望者は少ない。これは行政的にも、この弊害を打破する指導が必要と思われる。」

さらに、大学の教員養成に対する要望としては、次に示すようなより実践的な学習の導入、および問題児に対する総合的な講義セミナーの開講などを求める声が多い。

「児童心理学(現場に即した)教授が急務ではないか。」

事例をとりあげた論議をとり入れられることを望む。」

「新任教師が一番戸惑うことは、担任学級をいかに運営するかである。特に問題児指導では、お手上げの状態になることが多い。」

「教職専門課程の中へ、現場での教師を講師として、生々しい問題児指導の実践を学習させてほしい。」

「問題児への総合的分析・探究が、学問的体系や分析により、論理的追求し説得力のある対策が講じられない。それぞれバラバラの勉強で、一つの問題に対して関連する、学問的追求学習がなされてはいないのではないか。」

(C) 学級指導

学級指導における新任教師の指導力については、その甘さに関して多くの指摘がなされているが、次の例にほぼ代表される。

「若い教師がスマートになり、生徒が心から打ち溶けない。基本的な日常生活習慣の面での担任の姿勢・考え方にきびしさがなく、生徒と同じレベルで見る傾向が強い。」

「ひとりひとりを大切にとか、ひとりひとりをよく知るとか、口では云うがただ観念論だけで、実質的にはあまり手だてが講じられない。教師と児童・生徒の人間関係づくりは、教師の若さという特権である程度はカバー出来ると思われるが、それにしても学級指導の本質の研究が要求される。」

「民主的ということばを借りて、生徒の意見尊重というが、一面、迎合的、悪くいえば放任的にもとれる。生徒と均等のことばづかい、同次元での動作が見うけられ、一見、友だちのようで民主的に見えるが、生徒からは尊敬されているという面は皆無。」

「小3～4年生のギャング的年令児童を統率し、他人に迷惑をかけ、自分勝手な行動をとる子の指導ができない。特に女教師の力が不足している。基本的行動様式の習慣化の指導が特に弱い。」

「学級指導とかかわって、二つのタイプの先生が見られます。第一は、中・高・大時代に生徒会活動・部活動などに力を入れ、子どもの気持をうまくつかみ指導がびったりいく先生です。第二のタイプは、学生時代勉強ひと筋にやって来た先生です。こうして先生は教科力はまあまあだが、指導力がまずく、人間的な魅力に欠けるようです。後者の先生がだんだん多くなっていくようで、心配している。」

このために、新任者は学級担任をはずしたい

という要望はかなり強いが、職員構成上それは必ずしも可能でないのということで、新任者の人間形成、人間関係についての要望が多く受けられる。

「私は中学校の校長の勤務が長いので、ここでは主として中学校の場合について述べてみたい。中学校長として山間へき地にも何回も勤務し、小規模へき地校の立場からも新採用者を直ちに学級担任に任命せざるを得ない場合にも何回か出会わした。しかし、結果はいつも期待を裏切られることが多かった。学級の生徒を掌握する力が余りにも不足しているのである。」

「新採用者はできれば一年間学級担任をはずし、見習いとして勉強させたいと思っているが、職員構成上必ずしもそのようにできないこともある。」

「熱心に指導にあたり、学級指導に喜びをもち、日日の確かな実践をしている多くの新採教師のいることは確かです。しかし、先日も研究授業で夏とはいえ、肌シャツ一枚で公開授業をする若い教師を見て参観者からきびしい意見が出ましたが、若い教師には期待と同時に常識を越えた行為に驚かされることもしばしばです。権利の主張には強いが義務には弱い現代若者の中での教師ですから、一面致し方ないのかも知れません。学級指導がまともにできるようになってくれればりっぱなものです。」

「小学校では、学級が閉鎖的、独善的な経営になるおそれがあるため、学年としての一貫した教育とその効率の面から、学年間教師の人間関係を豊かにし、教師の協力や組織化をはかることが今後必要である。

そのためには、学年間で各学級の担任教師との話し合いを十分に行ない、それぞれ協力していく態度を整えることが必要であるため、教師として温厚、誠実、協調的な性格の持ち主でありたい。」

学級指導力の向上のためには、大学教育および学生生活において、次のような講義の内容と方法、教育実習の期間延長、クラブ活動の強化等の具体的提言が多い。

「学級指導は何を指導することなのか、あいまいであり、これらの理解力、指導力は極めて貧弱である。それについての学習はほとんどなされていないので

はないか。即ち、講義の内容が抽象的すぎて、学問の領域で学習が進められているのではないか。大学での学習が現場での教育にほとんど生かされないと、新採教師は述べている。」

「大学の単位講座にはないと思う。しかし重要な指導分野であります。ゼミのような形で研究させ単位修得を考えてほしい。」

「学級担任としての心構え、道徳教育、学級会活動、学級指導、生徒理解、教育相談等々もっともっと力をつけていて欲しい。このため、教育実習期間を大幅に延長する必要がある。」

「子供の組織化ができない。未経験だから当然だが、早くに組織化できるように努力すべきであろう。参考として、高校・大学時代に部活などに参加したり、またはリーダーを務めたものは、組織化が早くできる。」

また、子供一人ひとりの性格をつかむ手だてや学習を、大学在学中にすることも大切だと考える。

「今、小中で最も大切なのは、良い学級作りである。そのバックボーンになるのが学級指導であるが、これ又、必要感・指導方法等が極めて弱い。」

教科担任の前に人間担任であること、教育は心と心との触れ合いから生まれることを、大学教育の中で培っていただきたい。」

(D) 学習指導

大学教育の中で専門の勉学は最も主要な柱として構成されているので、狭い領域における知識・理解についてはかなりの評価を受けているけれども、教師教育という立場から見ると、いま一歩知識を構造化して生徒の学習に高める見識とか姿勢に対する指摘が数多く見られる。

「最近採用される教師は、学習指導面における実力というものを十分に身につけていて、たのもしり限りである。しかし、学び方とか発見学習といわれるような児童・生徒が求めて学ぶような指導のあり方が理解されていない。」

「新任教師の中で子どもを教えるための教科的知識や能力はありながら、実際の教室内では、子どもはてんでばらばらで遊んでいるといった場面が見られ

た。何か教師として能力に物足りなさを感じる。生きた子どもを相手に、それぞれの能力を伸ばすのが教師の任務であるならば、もっと人間教育の本質的立場で指導にあたる手だてがあるはず。」

「学習指導の成立を児童個々に即して求めることは、極めて大切なことと考えるが、授業を通してどのように組み立てるか、具体的な手法を工夫したり創造する意欲に弱い面がある。一般的な方法にのみ流れていて他の方法を試みたり努力することが少ない。児童生徒の反応から学んで更に自らの工夫を実践するような意欲・気迫を望みたい。」

「授業がわからないのは、教育内容が高すぎるか、子どもが悪いかどちらかだと割切った教師の意識の低さが問われた時があったが、改訂後の今日に於ても、それは同じ現象を呈している。特に指導法の工夫や教育機器の活用に対する意識が低く、一斉授業の押しつけ授業が新採教師に多い。」

「基本的な事項、正しい表現（ことば、文字）ができない。誤字・変字・筆順の乱れをする。それを意識して直していく。生徒と共に学ぶという意欲に乏しい。特に中学校への新任者にはこの傾向が強い。」
「自分はわかっているのに、一人しゃべりで自己満足をしている。生徒が理解したかどうかの評価（指導技術）が不十分である。」

大学における教師教育の内容としては、専門的知識・理解を具体的な学習活動と結合させるための教授設計、教授スキル等の指導の必要性にふれる提言が多い。

「1時間の学習で、ひとりひとりの子どもにどんな力をつけるかを明確にし、力をつけるための教材をどのように解釈するか、そして学習活動をどのように展開するか、また、主発問・子どもの反応予想・板書計画などの学習指導案作成の技術を具体的に指導し理解させる必要がある。」

「学習指導法の基礎的事項を身につけてきてほしい。」

教授の指導が多く、学ばせ方の指導が薄い。もっと教育実習をふやしていく必要がある。インターン制が今後必要で、一年間くらいの現場実習が必要に思う。」

「初任教師の中には小規模校へ赴任、すぐ複式学級

を担当する人もある。複式指導の技法、教育機器の利用法の研修も大いにとり入れ、アイデアを駆使できる。巾の広い指導のできる教師の養成を。」

(E) 教職専門

まず、教職専門の理解の不足とか、現状の問題点にふれる前の段階としての、学生の教師という職業に対する心構えに、もっと厳しいものを持たせてほしいという願いが散見される。

「専門職とは厳しいものだと考える。安易な気持ちで教職を希望する者が増加している傾向が強い。」

「医学さえ単位を修得すれば、医師として成立するというような甘い考え方が多いのではないだろうか。予防・臨床がわかり処置が必要のように、教育者は、教育学だけでは務まらぬ。教材研究、教育方法、その他の人格、識見のより高さ・深さを忘れては成立しない。」

「親との懇談などで、母親の勉強ぶり、話しぶりについていけない。もっと確たる態度で適切な助言ができる、自分のモノを持っていること、新卒者には加減する親もあるが、かなり厳しい親もある。」

上記のような現況に対応するためには、もっと大学自体の自己批判、自己改造が必要で、教育内容に対する要望も次例に示すように最も根拠的な教育原理から、学習指導法、授業分析などの実践力にいたるまで幅広いものがある。

「大学の先生方が現場の教育の実態をもとに講義を進めてほしい。」

「学者をつくる大学でなく、教員をつくる大学です。」
「現在の教員養成では望むのが無理ではあるが大学における教職につくための単位のとり方を再検討すべきである。」

「教育観、教師観が薄い。教育専門職としての意識を確立して来てほしい。教育熱に燃ゆる教師が少なく思う。教育学・心理学をもっと多くして、新任教師なりに自己主張できるようになってほしい。」

「世界の教育思潮については、どこで学習するのか。世界的な教育学者の考え方や彼らの教育的情熱、教育の方法について御指導戴きたい。」

「教育哲学にも力を入れてほしい。哲学なき教師が

いかにも多い。」

「日本の教育の歴史的伝統と継承。現代教育についての課題と問題点など教育現場に生きる哲学をしっかり身につけてほしい。」

「授業分析の方法。一人ひとりの学力の定着の見極め、調査の仕方、評価全般にわたっての教育的あり方など身につけたい。」

「教職専門を教育実践にどう生かし切るか。この点のカリキュラムの構成をもう一度吟味していただきたい。望むこととして学校教育の対象である子どもの本質と教育とのかかわりをもう一度突込んでいただきたい。」

「教職専門分野では特に現代っ子の心理学とでもいうべき児童の心理に重点を置いた課程を大切にしたい。児童生徒の発達心理学を臨床的に把握する講座がほしい。」

「学習指導法、心理学等在学時代にもっとやって欲しい。かつて、ある大学の生徒の実習生を迎えたが、彼は実に生徒に対してのしつけの面に厳しい視点で指導していた。その生徒が、学校で厳しく指導を受けていると言っていた。」

「中学校の場合、どの先生も自分の専攻された教科の専門性は発揮されますが、道徳の時間の指導、学級会活動、学級指導あるいはクラブ、部活指導など、全く勉強不足だといえます。また校務分掌など学校運営に関しての意識も低いようです。もっと教育というものをバランスよくとらえる感覚が必要だと思います。」

(F) 教科教育

学習指導の項とかなり重複しているが、教科教育では、教科内容に対する知識があっても教育実践に生かされていない点が、特に強く指摘されている。

「高度な知識をもっている反面、教科に関する基本的な知識に乏しい。」

中学校段階の知識が確実に理解されていない。しかし、一般的には年々新採者の教科教育に関する力は伸びており、教材をそつなくこなす。教科に関する力量不足のため、父母、生徒の問題になる者は非

常に少なくなってきた。」

「自分の専門教科については、学問的な知識は持っているが授業に生かされない。それでも大学で専門的に研究して来たのかと疑いたくなることがある。大学で身につけて来たことを、わかりやすく教えることが不足している。」

せめて自分の専門教科ぐらいは、誰にも負けないという力をつけてほしい。」

「教材の分析など詳細に究明できるが、それを生徒のレベル（実態）に合わせて、「教材化」する点が弱い。教育実習に対するかまえも、やや受身的であり、積極性に欠ける。」

「理科の先生が『私は生まれてから種をまいて生物を育てた経験がなかったので困った』という話を聞きました。極端な例でしょうが、教科教育というか、専門教育というか、あまりにも専門に片寄りすぎて小中の教師には不向きだと思います。」

「教科に強くなることが大切である。そこで、教師として教材（題材）をどのように構成し、仮説を実践し、分析・検証を繰り返すように努めてほしい。なお、小・中学校の児童・生徒を対象とする公教育の現場では、自分の専門でないからと子どもから逃げることは許されないと思う。公教育という立場から真正面に取り組むべきだと思う。ややもすると若い教師は、自分の専門教科以外は逃げてしまうことが多い。」

上記のような問題点を克服するための一つは教科教育法の研究の充実であるとして、次例で示するような指摘が多く、それとともに、最初から十分なものを期待できないのは当然だから、教師になってからも引続いて勉強する態度を継続できるような教育の要望が強い。

「教科の本質を具体的な教材のなかでとらえるところが弱い。抽象的な把握はあるが具体性に欠ける面が多い。したがって、教科教育が子どもにとって本質的なものとして受容されないことが多い。具体と結びつけた教職専門の見識を身につけるような教育を、教師になるまでに施すような方法は考えられないだろうか。」

「新しい教科教育法をもっと開拓してきてほしい。」

現場の先生方より古い講義式の授業が多く全く話にならない。」

「教材研究（分析・解釈、資料化等）から学習指導（児童の実態）へのつながりが理解されていない。」

「実際の教育現場に入ってみると、学生の頃はあまりにも狭い部分的なことをやっていたものだと思懐される人が多い。然し、狭くとも懸命にとりくんできた在学中の学び方が、生涯教育的に身につけていれば、教育現場では十分いかされるものと思う。」

「教科の指導については力を持っているし、自信も持っておられるようです。ただ現場へ入ってしまうと本を読んだり、先輩教師にたずねることがなく、急に勉強しなくなってしまうのが気になります。そのため教師になってから、伸びていかないような気がします。」

「20年、30年後の学校教育の中での教科教育を考える時、広義の教育工学的手法、新しいメディアの操作能力は必須のものとなる。」

カリキュラムと授業を設計する手法も、必須である。」

(G) 新採用者の教師としての自覚

教職教育ともかなり深い関連があり、一口に教師としての自覚といってもその程度にさまざまな段階があって、新任者にのみ強い要望をするのは酷でもあるが、次のような意見と希望が代表的なものである。

「教師としてのモラル不足（基本的な生活習慣、礼儀、言葉づかい等）教師自身が、服装、言語、礼儀、作法ができてなく、子どもの教育に大きな障害となっている。」

教師（教育者）としての自覚不足。

教えるものといった上位置にとまり、指示、命令的な姿勢の者と、反対に教師も人間だといった姿勢でなれ合いになる者、両極端になり、研修不足（自らを高める勉強、人にたずね、聞く姿勢の弱さを痛感する）となっている。

新卒者ですぐに現場の即戦力として、すばらしい力を発揮する教師に恵まれたことがあるが、大学教育のみで解決するものでなく、その人物の生育歴、

家庭等の影響が大きいと思います。しかし、教育者なるが故には、職業観にもえて、自己改造していったほしいものである。

教育者としての使命感、責任観にもえた人間形成（心づくり）をしてほしい。（やる気のある教師）」

「一般の会社員と比べれば、教師の世間はまだいい方であろう。しかし、言葉、服装、礼儀作法等は気になることが多い。辞令を受け取るのに片手で受け取るような新採もいる。聖職者と言わないまでも、自分は人にもものごとを教える立場の人間であることを忘れないでほしい。」

学生時代の安易さと、実際の教育現場に立ったその地点のギャップが大きいようである。

教育に生涯をつくし、燃えて教育現場に立てる識見と資質の養成、また自覚がほしい。」

「まじめにやろうとする人がふえていることは、結構なことだが、子どもを教育することが、どういうことなのか、基本的なところでわかっていなかったり、一々指示を受けて、また、その指示の範囲内でしか事がとり行えないということで困ることが多い。」

「教職員希望者が多く中から選ばれてくるので人間的知能的にすぐれた人材が以前より多い。また教職につけたことを、一つの生きがいにして誠実に仕事に対していることも事実である。」

今、モラトリア人間ということばが使われているように、成熟、大人という見地から見ると弱い人間が多いのではないかと考えようによっては、「だから現場でつくり直しがきく」ということもいえるだろうが、教育現場においては、指導者としての心構えをしっかり持ってほしいと切望する。それは、

“生徒とちがうのだ。私は、この子たちを指導するのだ。その責任を負わされているのだ”という心である。“生徒と友だちになりたい”ということばは、良いことばだが、若い彼等にその深さが理解されず、現場では、どちらが大人かわからないような指導の場におちいるものをつくっているのではなからうか。」

「こまめに体をつかうことが少ない。施設や教具の管理についても責任感がうすく、教室、教科特別室の管理も整頓も不十分な者が多いようである。（こ

れは、大学の研究室、教室がひょっとすると乱雑になっていて、その影響を受けているとも考えられる。」「現在の中学校は、生徒指導上幾多の問題をかかえている。生徒の生活の中へ思慮深く、積極的に入って粘り強く苦闘を重ねる気構えが必要である。若い女教師に甘えがありはしないか。

部活動は、中学校教育では重要な役割を果たしている。意欲的に部活動指導を進める情熱を望みたい。」「教師はどうあらねばならぬかについて、厳しさが足りない、教師として四角四面になる必要は毛頭ないが、学生気質で生徒と友達ぐらゐの感覚では、教育はできないことをしっかり自覚させたい。

学校は一人で教育しているのではない。組織的な活動によって教育する場であることを自覚し、真剣な態度で先人のことばを聞くことや、組織人としての在り方を学ばせたい。

余り勉強をしない（特に教育書を読むようにしたい……。）」

「教師は学級では子供たちの中心である。だれもそのときは、他人にたよることはできない。一人前の教師もベテラン教師も、ある意味では同列である。このことの意味をよく正しく理解してないといけない。」

「教師は結局は人間、人柄で勝負がきまる。学力も勿論たいせつであるが、普通の学力をもって人間らしい人間の採用が現場ではほしい。

教育をビジネスに考えないで生きている人間の魂の教育を未熟な人間が未熟な人間に対して行っているという自覚を腹の底より持つべきだ。」

「昔のような宿直も日直もなく、時間がくれば施錠して追い出され、ゆっくり先輩教師と語り合ったり、人間関係を作る機会がほとんどなくなっている。よほど積極的に求めていかないと孤立してしまう。」

このように新任者の一部にみられる教師の自覚の不足に対して、教師教育を目的とする教育学部の在り方について、少なからぬ批判と要望を含む次の例のような問題提示もみられる。われわれとしては、若干の少数例によって全体把握を誤ってはならないと思う場合もなきにしもあらずだが、しかし批判は批判として謙虚に受

けとめたい。

「子供というものが十分わかっていないし、とにかく大学、特に、教育学部というものは何をするのか、文学部とか、理学部とかとは違うのかどうなのか、そのあたりを明らかにして、今後の問題に対処していったいただけたらと思う。」

「もっと専門職として能力と勤務のきびしさが必要。産業界では、即座に首になるような者を学校ではものすごく助力しなければならぬのは情けないし、大学での指導に生ぬるさがあると言いたくなる。将来の日本を背負って立つ子どもを教育する学校である。その教師としての能力、人格、品性、心がまえについて大学での単位習得に余りにも甘さが多いのではないか。教育実習についても4週間中の2週間位で何が習得できるのか全くナンセンスと言いたい。」

「教員養成大学卒業より他大学卒業（4年制大学）の方がスケールも大きく、個性的、情熱的、創造的である人が多い。多くの例をあげることができる。」

Ⅲ 最近の新採用者についての意見

新採用者の問題点については、いままでの各項目と区別しては書きにくい設問で、重複意見が多くならざるを得ないが、それでもこの項に対しては生徒指導に次いで最も多くの意見が寄せられた。そのうちのいくつかを列記してみる。

「専門教科については自信を持っている。このことについては、自他共に認めてよい。しかし、教職以前の問題でかなり指摘しなければならないような思いがしてならない。たとえば、教師らしからぬ服装で平気で教壇に立ってみたり、ジーパン姿で公の席へ出向いたりしている。これらに対する先輩の注意にも素直に耳をかそうとしない。このように教師というよりも、人間として未完成的な新採用者の意外に多いことに気づく。

私立大学出の新採用者は、これら基本的習慣を割合にしっかりと身につけているようだ。」

「最近是新採用者の質がよくなったとよく言われます。事実新採担任学級において指導力の欠除から管理者が大変困っているという例はあまり聞かなくな

りました。

しかし、能力とは別に教員としての人格面においていろいろ欠点が指摘されています。第一に基本的な生活習慣が形成されていない。例えば、職員室や教室の整理整頓、教員住宅における生活は社会通念を逸した言動が多く、「あれでも先生か」と父兄のそしりを受けたりすることがよくあります。」

「質的には大変よくなってきており、理解力・判断力は早いですが、

1. 仲間意識や組織人としての自覚に欠け、協調、協力的な態度に多少問題が見受けられる。
2. 勤務服装等に関しても自己中心的な言動が多い。
3. 積極的に自ら学び取ろうとする意欲はあるが、先輩上司との人間関係の中で教を乞う態度に欠ける。
4. 童心にかえり子どもの中に飛び込んで遊び学びとることができない。」

「悪い面で二つの型があると思う。

1. サラリーマン型

個性がなく、上司の言葉を適当にきき、同僚とも深く交わらず目立った欠陥もなく勤務している。授業に心血を注ぐわけでもなく、ひとりよがりの面もみられる。

2. 不平不満型

職場への不満、社会への不満は言うが、改革への建設的な意見はもたない。特定教科の指導は熱心である。

両者とも、勤務校の特性、伝統を早く理解し、職員と意志交流をし、協調して教育推進に当たってほしい。また、地域社会の人々の信頼を得るような社会性を身につけてほしい。」

「多面的な対応が迫られ、毎日の生活の中で一挙手、一投足が子どもの眼にさらされる教師の生活は考えてみればこれ程厳しいものはない。特に最近の中学生教育のむつかしさと大切さは、言をまたない。

一教師の言動が、学校の生活指導の姿勢をくずす。心に『共に働く教師たちの願いとひびきが聞こえる教師（協調性のある人）』

子どもと対話のできる教師を……

新しい子ども像を持つ上に大切だし、動きを知る上

に大切だ。

先輩によく聞く教師を……

“教える” “学ばせる” という仕事は、手づくりの技が多く、見て感じ聞いて自分の実（み）にしている技術をもつ者が伸びる。

新採者をみていると大学生活と比べて大変だろうなと思う。次々の仕事、学級からの意見聴取、研究授業、各計画の作成……。大事な学級づくり、授業づくりがあとにまわされる。身にふりかかる火の粉を振りはらうのに精一杯ではないかと思う。相当な覚悟が必要であろう。

基本的な生活習慣を身につけること。（言葉、行動、服装）

教師としての自覚をすること。子どもとのなれあいになり、指導者としての権威、力量を自ら高める努力をしない。」

「男子がほしい。女子がくると男子の負担がその分重くなる。

大学時代つまらない遊びしかやってこないような気がする。（クラブ活動指導でよくわかる。）知的な魅力をたたえた者は少ない。

本を読まない。新聞も三面くらい、論説など見向きもしない。教育雑誌を進めても買い求めようともしない。車はよく買いかえる。

基本的生活行動様式が身につけていない。敬語の使い方、電話の応待、すべて事務的、形式的、心づかい。つっけんどんな態度、会話に余韻なし、適当に早く割り切る、短絡的思考。」

「・子どもに対する話し方が極めて下手である。話し方の研修が必要。

・できない子どもに対する指導に欠ける。個別学習の研修が必要。

・集団からはみ出す子どもに対する指導が不足。教育相談の手法の不足。

・むづかしいこと、やっかいなことをさけてとおる。安易に流れる生活態度。」

「危険防止の配慮が足りないために、若い教師の学習に子どもの事故が発生しやすい。」

このような人格面、社会性に関する問題点とともに、本人の精神面の弱さからか、教育現場

の現状に適応しえない新任教師が増えつつあるという指摘が多くなってきたことは、最近特に気にかかる現象である。

「小・中・高校と割合に成績もよく、順調に成長してきた新採者に、時に見うけられる傾向は弱い性格ではないかと思う。逆境にあっても、困難にぶつかっても、それに負けずに頑張り、乗り越えようと努力する若い情熱を持った教師でありたいと願うのであるが、すぐ逃げ腰になり、教師をやめたがったり、自信を失ってしまったりする新採者が時々出現することである。これは現在の過保護での育て方で成長した青年の姿であるかもしれないが、学校教育にも責任があると思われる。」

また順調に成長した先生に時にあることは、「子どものつまづきがわからない」ことではないか。どうしてつまづくのか？ どこにつまづきの原因があるのか？ 等、教師自身わからないので、案外見逃がしてしまうことがありはしないかという点がある。その点は学習指導法の勉強で補えることがあるので学習指導法を十分に学習して教師になるように心掛けたいものである。」

「一部の新採者にノイローゼ症になるものがあるが、先輩教師（仲間）と話し合い、学び取って前進していく姿勢を持つように努力することも大切である。」

「精神的に弱いものがある。生活環境、生活律の相違や他人との対応、指導のずれ等々、かみ合わず悩むものがある。頭の中だけで考え、他からみると全く自己中心的であるとしか思えない場合があり、適応指導がいる。」

(1) 岐阜大学の教員養成に関する意見

最後に県下教育界で教師教育の中核的役割を担うべき岐阜大学教育学部の教育についての率直な見解を求めたところ、さまざまな意見をいただいた。中には大変厳しい意見もあるが、これらについていま直ちにひとつひとつつわれわれの見解を表明したり弁解することはひかえて、それぞれを激励・忠告と受けとめて、内部での連鎖的な自己改造への検討資料として十分活用したいと思っているので、それらのご意見を以

下若干列記する。

「教員養成の特色をもつ大学として、社会の期待にお答えいただきたい。一般大学と違う何ものかを兼ね備えてほしい。」

学校教育の重要性が強く叫ばれている今日、教員養成学部も襟を正して、教員養成に万全を期していただきたい。」

「今日の教員採用制度上の問題点もかなり多くの影響を持っているが、採用されて現場に赴任した若い教師の中にも果してこれで正常な子どもの指導に当たれるか、疑問な人物も時に見られる。つまり、知的に優れていても、教師として適格ではない。望ましい人間形成を目的とする公教育の立場から考えて、むしろ、人格的な面で優れた人物こそ、望ましい教師像であると思う。」

特に現今の教育的危機といわれる時代にこそ、将来教師となる学生を養成される貴大学に、切に、期待と要望をいたします。」

「小中の先生は、学級指導、生徒指導、道徳・学会活動・生徒会活動の指導は本務である指導をしてほしい。教科指導のみが、本務であるかの如き錯覚がある。」

「他大学出身者に比して、必ずしも良いとは言えない。一言で言うなら、教師としての姿勢に甘さがある。従って特に、小学校教員養成のカリキュラムは、大いに改革の必要があろう。また、それを期待する。」

岐阜大学の現場の評価には厳しいものがあることを、十分御理解いただきたい。」

「各教科の教科教育法・教材研究の講座を、いいかげんのものにするのではなく、現場と結びついた、きちんとしたものにして、充実させていく方途を考えてほしい。また、大学の先生方と現場の校長、あるいは事務所の指導主事などとの話し合いの会を、大学として企画し、実現させてほしい。（やっておられる教科もあるようだが。）とにかく、今のままでは、新採自身はもちろん、受け入れた現場としても、困る。」

「大学の教職関係の講座の中に、「児童・生徒をどのようにつかむのか」という具体的内容のものを持ってほしい。そこでは、現在の状況も含めて、児童

生徒を生活する人間総体として取り上げ、状況の認識と、それへの対応に対する心構えといったものを育ててほしい。

大学の講座の中には、特に、教職につくという観点からのものが、ほとんどないか、なおざりにされているか、そんな感じがする。分析だけでなく、もっと総合的、関連的に、あるいはもっと動的に、現代的に、児童・生徒をとらえる内容の講座を設け、教職につくという意識を育てる必要があるのではないだろうか。」

「教育実習に対する不満が大きい。

- ・期間が短かく、必要最少限の指導上の技術・知識さえ備えていない者がいる。
- ・大人数学級、大規模校での指導法は、実習しているが、小人数学級・複式学級の扱いは0に近い。
- ・「一斉指導」の指導法は身につけているが、個別化、主体化の方法が弱い。

こうした問題点を解決するために、教育行政機関研修機関・教育諸団体・現場諸学校との結びつきを深めるよう配慮してほしい。」

「教育実習を3年生、4年生の2期にわけて実習できないか。教育実習によって、学生の教師という仕事に対する考え方に真剣さがでてくるのではないだろうか。」

「授業案のたて方、授業の見方、生徒のとらえ方など具体的な指導が、不足しているのではないか。実習において、それらは指導するのだが、ある程度の指導（きめのこまかい）が、ほしいものである。

特に最近の中学校のおかれたきびしい状況から、教師についての強い自覚、この道で生きていく意志が必要となろう。そういう強い意志を固めて、なお、（教師となる）気がまえがほしい。

実習校だけでなく、（せめて新採用者の学校だけでもよい）現場との交流が、必要ではなからうか。大学の先生方と、現場の教師が、もっとつながりを持たなければ、実習そのものも形だけ、または、負担とのみ、考えられてしまうおそれがあると思う。」

「現場で役に立つ内容は何かということを大学は考えてほしい。そのための努力を怠っているのではないか。実習生を現場へあずけっぱなしにするのでは

なく、学生の実習期間には、大学の先生も積極的に現場へ出向いて共同研究をするくらいの姿勢を示してもらいたい。」

「大学に入学と同時に、一般教養、専門教育で人間形成をするのでなく、児童・生徒の教育にたずさわる人間を育てるのだという意味で、現場に出ている1年目、5年目、10年目の先輩（教師の卵）と交流をはかってほしい。また、教育現場では解明できない分析や理論を大学が担当して、相談にいけるようなシステムになっているとよい。

図書館や資料室には、現場の実践や工夫や教材がいくらかあり、困ったらいつでも飛んでいけるような研究・資料室を持っているとよい。」

「岐大入学時は、相当な学力をもっているでしょうが、入学後、3年半は殆んど勉強していないということでしょうか。教師として要求される基本的な学力さえも忘却の彼方にあるとしか思えません。」

「クラブ活動・部活動の経験を大学ではぜひさせたい。岐大へ入るためには、高校で体育部では（選手生活をしておって）だめといった事をきく時、どうしてもクラブ・部活の生活をさせたい。勉強の優等生ばかりであるだけに余計必要。特に、若い先生が運動に冷淡などは、全くナンセンスでお話にならない。専攻が何であれ、二・三種目の審判が出来る力が必要である。こんなことは、大学がその気になればすぐ出来ることと思う。

こういうことは、教育事務所長にも何度も申し上げましたが、「大学の先生はえらい先生ばっかりで、聞いとくれんでなあ。」と、言っておられました。現場の意見も、大巾に尊重して頂きたい。」

3. まとめ

今回の調査では、本来統合された一つのエデュケーション活動をいくつかの視点から眺めて、教師教育上の問題点を分析的に解明したいと考えたが、回答を用意した選択肢から選び計量的に処理するという形をとらず、回答者の心底にあるままの思いを聴取したいとして自由記述方式にした。このため、各項目で重複して同じような意見が述べられ、視点別に明確に分離した問題点、批

判を取り出すことはたいへん困難である。しかしせっかく貴重など意見なので、今後これまでの各種資料とともに研究プロジェクトとしての分析を行い所期の目的を達したいと願っている。

そこで、この項では個人的見解の段階をこえることはできないが、研究総括者の立場から研究推進の方向を定めるための指針として包括的にまとめた。

まとめ方にはいろいろ考えられるが、大別すれば、意見開陳の対象となった教師個人から得た印象に基づく個人としての教師に対する要望批判に二分され、それはさらに以下のようにいくつかの問題点に細分できるのではないかを考

1. 個人としての教師に関するもの

1-1 人間としての基本的な生活行動様式

1-2 教師としての人間的な資質

1-3 専門の学力と教育実践力

1-4 教職専門の基礎とその具体的展開

2. 大学教育に関するもの

2-1 教員養成大学の在り方と教官の姿勢

2-2 教育課程と教育内容

2-3 教育実習

2-4 教育研究と教育実践

2-5 大学と教育現場との協力関係

2-6 今日的な教育課題

プロジェクトとしてはこのような検討問題について個々に分析考察を加えねばならぬのは当然であるが、一方学部教授会としてはそれらが集約された形で学部充実方策の検討合意をえて改革へのプログラムを取りまとめる努力を急がねばならない。

この点については、次の三点を取り上げてはどうかと考えている。

(1) 大学院設置構想の検討

これは主に前述の1-3, 2-1, 2-4, 2-5に深くかかわる問題である。

教育系大学院設置のメリット、デメリットについては全国で既設の大学は十指に余るので、それらの成果、反省を十分参考にすればよいが、

本学部でもし設置するとすればその特色として何を考えるかが十分論議されなければならない。個人的には、本学部の場合は全国の国立大学の中でも特に大学と県教委との研究協力信頼関係及び教育実習運営が円滑なことで定評のあるうちの一つであるから、そのことをどのように生かすかが課題であろうと考えている。

そこでは研究面で最も問題になる現実と無縁または遊離している理論という批判の打開策としてどんな形で現場の協力を得て理論を補完するか、大学院教育と現職教育とをどうかみ合わせるかなどが具体的な検討点となるだろう。

なお、1-1, 1-2の問題については、確かに教育の最終目標がそれぞれの段階の深味をもつ人間形成ということに尽きるけれども、わたしはその人間づくりはそれぞれの学問研究の厳しさを徹底させることによってそれを追求体得させることこそが大学としての責務ではなからうかと思う。

(2) 教科教育学の体系化

これは主に1-4, 2-1, 2-4にかかわる問題である。

一般に教育学部の在り方に最も深く関連するのは各科の教科教育の充実発展であるが、この教科教育の最大の弱点はそれが末だサイエンスとして成立存在し、認知されるまでに到っていないことである。

そこでいま切実に求められているものは各科の教科教育の理念とその研究内容に共通理解を産み出し、その研究方法を科学的にすることである。

既にこの研究プロジェクトとしても、基礎資料の蒐集とともにいくつかの方向で共同討議を行なっているが、差当たり次のような研究方向で進むのが現実的ではないかと考えている。

・各科の共通理解を産むためには、近く完成予定の総合校舎の中に教科教育研究に適した特別教室、準備室を整備して集団研究の場を確保し共同研究体制を推進するとともに、教育センター、その他教育研究機関と協力して現職教育と

一貫性をもって研究・研修内容の整備をはかる。
 ・研究方法としては先ず理論構築の前提としての教育実践の分析研究を深めるために教育工学的手法を活用して各科の特性に合った授業分析手法の追求を行う。

・研究の科学化のためには当学部のカリキュラム開発研究センターを中心として教育研究情報の管理流通、検索システムを開発して累積的研究の発展を容易にする。

(3) 教育課程と教育実習の改善充実

これは1-3、2-2、2-3、2-5にかかわる問題である。

ここで最も中心になるのは、小学校教員の養成のためのカリキュラムにもっと光をあてるということである。しかしこのことは僅か2カ年の専門教育の中で中学校と小学校の両方の教員の資質をつけよという宿命的な要求にこたえるには教授スタッフの数と学生の学習時間数などの関係でかなりな難問である。

しかし、何等かの打開策を制約された条件の中で見出す以外にないので、教育実践者の協力を積極的に受入れ、専門研究の内容に教育実践に関するものを加味する方途を協議検討したいと考えている。

いま一つは教育実習の成果を上げることが急務で、これには特に実習前の学生の自発的学習を可能にするための、VTRなどを活用した学習授業設計用の資料、学習項目ライブラリの作成などを急ぎたいと考えている。もちろんその他、教育実習指導体制の強化なども種々検討中で、既に新学習指導要領に即応した教育実習の新しい手引書は作成を完了した。また、教育実践の現状、課題についての情報を提供するための資料を県教育センターの協力により作成した。

教師教育における大学の教員養成の役割は、現職教育も含めた教師の生涯教育の全体的なプロセスに位置づけられるべきであり、今回の学校長の意見もこの点を配慮して、教師の準備期および導入期として位置づけたときの指摘が多かった。このことは、逆に大学が教師の生涯教

育としての視点から考えて、何を教育すべきかさらに何を教育できるのか明らかにする必要がある。たとえば、準備期としての一般教養、専門知識、教職基礎知識の習得と教師としての方向づけ、導入期としての教授・学習指導の基礎、生徒指導、校務について実習を通し学習が、形成できる教育内容について教師の生涯教育の立場から検討すべきである。このためには、単なる大学の独善的な教師教育でなく、今後各教育機関等と連携して、教員養成の在り方を研究すべきであると考ええる。

この一連の研究を進めるに当たって、岐阜県教育センター、各教育事務所、各教育委員会の方および調査に協力いただいた多くの学校長に厚く感謝の意を表すとともに、今後この貴重な意見を参考にし、教師教育の改善に努力したいと考えている。

参 考 文 献

- 1) 石原正也(1981)“教育方法等改善研究の計画と経過の概要”カリキュラム開発研究センター研究報告 Vol. 1 No. 2
- 2) 石原正也, 太田祐周, 他(1980)“在職5年目教師の教員養成に関する意識調査(1)”岐阜大学カリキュラム開発研究センター Data Report No. 91
- 3) 石原正也, 太田祐周, 他(1980)“在職10年目教師の教員養成に関する意識調査(1)”岐阜大学カリキュラム開発研究センター Data Report No. 92